

日本の中のフランス革命 ——「草莽崛起」から「民権」へ——

加藤 晴康

本日は、大変大きなタイトルをつけました。なんだと思われるかも知れません。明治維新とフランス革命といえば、これまで明治維新についての根本テーマともいえたもので、さまざまな議論が交わされております。ですから西洋史を専攻している私が、いま何をということなのですが、かつては明治維新とフランス革命という主題は、基本的にはフランス革命を市民革命の典型と捉えて、市民革命としての明治維新とフランス革命を比較するという問題関心が中心でした。しかし、これには大きな疑問があります。もちろん、比較という方法自体は、有意義な面もありますが、実は日本のいわゆる近代への動きと言うのは、フランス革命と同じ時代に始まっていると考えられます。いいかえればフランス革命を引き起こし、それがもたらした世界史の変動と、日本の近代への動揺とは連なっているということです。19世紀ヨーロッパの歴史はフランス革命に端を発するさまざまな問題に直面して形成されて行くといえるのですが、まさにその時代に、日本も新しい世界に直面して行く。その意味では、フランス革命がもたらした歴史の転換と日本の明治維新へのプロセスは、世界史としては同時代のものである、しかもこれはヨーロッパのフランスと、遠く離れたアジアの日本との一対一の対応関係ではありません。その間にヨーロッパの国々や、エジプトがあり、インドがあり、ヴェトナムあり、中国あり、琉球がある。それらの動きと連なりながら、日本も世界の変動の中に入って行きます。そうであればフランス革命と明治維新というテーマは、フランス革命の時代にさかのぼりながら、同時代として日本がいったいかなる問題にぶつかることになったのか、同じ時代のヨーロッパの社会も、より直接的にフランス革命という大変化に直面しながら、右へ左へと揺れつつ新たな時代に進んで行く。アジアやその他の世界も、違った形ではありながら、その変動の波にぶつかって行く。そういう世界の中で日本がどう対面し、そのことが日本にどういう特質をもたらしたのか、そのように問題を考えて行きたいと思うのです。「フランス革命とアジア」という公開講座のテーマが設定されておりますので、私はここで日本に焦点を絞りながら、いま申しましたように、フランス革命によって揺り動かされたフランス、さらには世界と日本やアジアがどのように重なり合うかを考えて行きたいのです。ただこれは大変な問題です。さしあたっては、日本におけるフランス革命、ないしはそれがもたらした変動についての日本での認識の変化を軸に、なるべくよく知られた事柄とのか

かわりの中で、上のことを考えて行く糸口にしたいと思います。

まずはじめに、大きく時代を分けておきましょう。18世紀末から19世紀の初め、フランス革命が起り、これに続くナポレオン戦争とともにヨーロッパが大動乱の時代を迎えたとき、先程申しましたように、その時代こそいわゆる日本の近代への歩みが現れるときです。この時期こそ日本がこの変動に直面する第一の転換期であったと申せましょう。第二は1840年頃、中国でアヘン戦争が起りました。アヘン戦争の日本への衝撃、影響はいろいろ語られているところではありますが、この衝撃は日本の対外認識に大きな変化をもたらしています。その意味で、フランス革命についての認識もその変化と結びついて現れます。第三が開国から明治政府の成立にいたり、日本が新しい国家体制を整えて行く時期。この時期は、その過程の何一つとしてフランス革命に端を発した世界の変動と関わらない問題はないといってもよいでしょうし、より細かく時期を分けてみることも必要でしょうが、なかでもやはり新しい国家体制のありかたに関わる自由民権運動が直接、フランス革命の認識の問題と結びついていることはいうまでもありません。

さてまず第一の時期ですが、この時、日本にはヨーロッパの変動を伝えるさまざまな異変が現れます。変動を伝える「窓口」の異変と申しましょう。当時、日本は一般に鎖国体制の中にあつたといわれておりますが、外に開かれた窓口は、決して長崎だけであつたわけではないことは、すでに御存じの方も多いでしょう。それと、これも知っている方は多いでしょうが、ついにつけ加えておけば、鎖国という言葉です。この言葉は、いま申しました異変にたいして、どう対処すべきかという問題関心の中で、以前にケンベルという人物が著した『日本誌』という書物を、幕府のオランダ通詞が訳して、それに『鎖国論』という題をつけたそこから鎖国という言葉が使われてくるのです。いずれにしても当時の日本は、一般に考えられていたほど、閉ざされた国ではなかつたといえましょう。ただそれは、限られた範囲にとどまっていた。したがって、他の国の人間や事情に接することのできた日本人も限られていたということは、お断りしておかねばなりません。

そのように開かれていた日本の「窓口」で、おこる異変の最初の現れは、北からの脅威です。すでに1730年代に、ベーリング海峡を探索したベーリングの探検隊の一部が日本の沖合にやってきて、安房国の浜などで水と食料を求めたりしております。こうして18世紀末にはロシアの太平洋岸への進出は活発化しており、それは直接日本の北方に現れて来ていました。そのことは、これまで北方の海域をそれなりに自分たちの世界としていた蝦夷人—アイヌの人々に運命の大きな変化として現れざるを得ない。そのクライマックスが1789年、まさにフランス革命の年ですが、その時起こったメナシ・クナシリ（目梨・国後）のアイヌの反乱、寛政蝦夷の乱と呼ばれた蝦夷地最後の反乱です。第二の「窓口」の問題は、琉球、朝鮮の沿岸への異国船の出没です。1787年、フランスのラペルーズが、琉球・朝鮮沿岸を測量しながら、蝦夷地方面をも航海しました。北海道の北の宗谷海峡は、ヨーロッパではラペルーズ海峡と呼ばれています。彼は遙か南太平洋をも航海するのですが、その彼にとって、東アジア、日本やその近海は重要な関心の対象だったので、いずれにしても、琉球や朝鮮は、日本にとっては外の世界との接点であり、蝦夷地とは違った意味で、日本にとっての境界領域であつたといえることができます。その領域に変化が

起こりつつあるのです。第三は、叩かれる清朝中国の門戸です。フランス革命のさなか1793年に、イギリスが清朝に公式の使節を送って通商を求めています。マカートニーの中国訪問です。これは第二回訪中使節アムーストの到来（1816年）に受け継がれるのですが、この時には使節を送った軍艦2隻が琉球、朝鮮沿岸を訪れてもいます。このように日本は、その周辺で新しい動きに直面することになっています。それは旧来の東アジアの秩序を揺るがすものということができましょう。それは端的に言えば、旧来の華夷秩序、そしてこれと結びついた日本の「大君外交」の動揺をもたらすものといえましょう。

さらに、フランスにおこった動乱は、より直接的な形で日本に波及してきます。「窓口」の異変の第四、長崎。その現れが有名な長崎のフェートン号事件（1808年）です。当時、オランダはナポレオンの支配下に入り、国王がイギリスに亡命するという状態でした。ところが、時のオランダの長崎商館長はこのことを幕府にひた隠しにしました。そのころ長崎の商館長は、幕府に対して、オランダから船が入るたびに世界のいろいろな動きについての情報を『和蘭風説書』として提出しておりました。ところが本国の動乱によって船の到来が途絶える。やっと入港した船によって新しい情報もたらされ、『風説書』によって幕府にフランス革命についての最初のニュースが伝えられます。ところがそれは虚偽にみちたものでした。「フランス国臣下乃者共徒党仕、国王并王子を弑し國中乱妨におよび申候に付、阿蘭陀国其外近国よりも同所江押寄及合戦申候・・・」（1794年一寛政六年風説書、『和蘭風説書集成』下巻、昭和五十四年）。ですから、幕府にとっては、フェートン号事件はまさに衝撃であったわけです。事件の半年ほど前から、幕府はオランダ通詞にフランス語を学ばせるようにしていましたが、この事件の後、英語、ロシア語も学ばせるようになりました。蘭学から洋学の時代への転換の始まりです。

さらにもう一つ注意しておきたいのは、これまで述べてきた「窓口」とは別に、ロシアをはじめイギリスやアメリカなどの船に救助された、漂流民の送還というこれまでなかった事態と、やがて活発化するアメリカなどの捕鯨船の近海への出没です。大黒屋光太夫のことはあまりにも有名でしょう。こうした事態は日本を取り巻く海域の状況の、大きな変化を意味していることはいうまでもないでしょう。さらに捕鯨船についてみれば、この時期はアメリカ合衆国の独立の時期でもあります。そして、日本の知らなかった新しい国であるアメリカの捕鯨船が、太平洋に進出してくるのです。それらの船が日本の海岸で、水や食料、薪炭をしばしば求めるようになります。メルヴィルの『白鯨』という作品に、こんな意味の一節があることは知られています。「もしあの閉ざされた国の日本が外国の人間に門戸を開くときが来るとすれば、それはまず捕鯨のおかげということになろう。いやその時は間近に迫っている」と。

このように、18世紀末から19世紀初めのフランス革命からナポレオン戦争へと続く時代は、旧来の東アジアの華夷秩序に対応した日本の対外関係のありかたが、大きく変化を迫られる時代の始まりだったのです。そのような変化に応じる典型的な例が、工藤平助の通称『赤蝦夷風説考』です。これはフランス革命の前、1783年に、北方の問題に対して書かれたものですが、次のようにいっています。「日本の力を増すためには蝦夷が第一である。それをこのまますておいて、カムサスカの子どもがえぞ地に入りこめば蝦夷もロシアの命に従うことになるから、もはや我が国の支配を受けなくなるだろう。そうなればいくら悔やんでも取り返しがつかないであろう」

(大友喜作編『北門叢書』第一冊、昭和四十七年)。こうして、日本にとっては蝦夷地における「国境」、そして蝦夷人の日本国家への取り込み、その日本人化が意識されるようになります。これこそ、今日の「北方領土問題」の起点であり、それは蝦夷地と蝦夷人の、やがて形成される日本国家への統合の始まりだったのです。丸山眞男は工藤平助について「前期的国民主義」という言葉を使っています。その当否はともかくとして、日本の国家の「国境」と「国民」が、ヨーロッパの力と対峙する形で意識されるようになってくる。それは旧来の華夷秩序の境界領域、琉球や朝鮮との関係、そして東アジアでの日本の位置の見直しに連なるものである、と申しておきましょう。

ところで、こうした異変はいったい何を意味するものだったのでしょうか。それが華夷秩序に変化を促すものであったことは、これまで述べてきたとおりです。しかし、それはもっと大きな世界の変動に連なっています。それを端的に表現すれば、ヨーロッパを中心に大西洋につながる世界の構造的変動。これは「大西洋革命」といってよいかとも思います。それと、この大西洋世界の構造的変動と結びついて進行するアジア・太平洋の「世界化」です。「大西洋革命」という言葉については、例えばフランス革命の位置を相対的に低くするものというような批判があり、議論のあるところです。しかし、フランス革命の意義を植民地や奴隷制の問題を含めて、より世界的に考える上でも、この革命を大西洋世界の構造的変動という動きの中で見て行くことは大切だと思います。それと今一つ、最近「環大西洋革命」という言葉が使われてもいます。しかしこれは大西洋を巡る地理的、地政学的視点が優先しているように思われます。ここで「大西洋世界」というときには、大西洋を取り巻くその沿岸地域というような地理的な範囲を示すのではなく、ヨーロッパ諸国が自らを中心に、大西洋の貿易関係などを軸につくりあげてきた構造的な世界の問題を意味していると考えてください。その意味では長崎は、日本に対して開かれたその世界の窓口であったともいえます。それゆえにこそ、大西洋世界の変動は直接的に長崎に現れざるをえなかったのです。ですから大西洋世界の構造的変動というのは、アメリカの独立革命を含み、フランス革命からナポレオン戦争へと連なった大変動によって、今申しましたこれまでの大西洋世界の構造的関係が崩れ解体してゆく。そして新たな世界の再編成に向かって行くということでもありました。その現れが、アジア・太平洋の「世界化」です。日本はこういう波の寄せる時代を迎えたのです。

有名なキャプテン・クックが南太平洋の探検航海をして、オーストラリア東海岸やハワイにいたったのは、18世紀末のことです。それからまもなく、こうした島の人々の世界は急速に、より大きな世界の中に組み入れられて行きます。大黒屋光太夫ほど有名ではないかも知れませんが、やはりロシア人に拾われた漂流民で1804年、レザノフにとまなわれて帰還した仙台の津太夫という人物がいます。彼の体験は大槻玄沢らによって『環海異聞』としてまとめられているのですが、それによりますと、彼はレザノフの船でロシアから西へ大西洋を越え、南アメリカの南端をまわって南太平洋のマルキーズ島に上陸、さらにハワイ沖を経て日本に帰る。日本人として最初の世界一周をしております。その中でフランス革命やナポレオンについての直接の言及はありませんが、イギリスの近くでは、フランス船と間違われるという緊迫した状況に出会ったりしています。

さて、こうしてあいつぐ異変に直面した幕府は、オランダ通詞や蘭学者らを通して、ヨーロッパの変動そして世界の事情の把握に努めるようになる。この時、フランス革命自体については「臣下のものどもが乱暴におよんで国王を殺した」という程度の認識から大きく出るものではなく、その意味はなお理解を超えていたといえましょう。それより関心をひきつけたのは、動乱の雄ナポレオンです。これについては、最近では岩下哲典氏が中公新書の『江戸のナポレオン伝説』を出されています。ですからそうした研究と重なってくる点があるかと思えますし、それらから教えられる点も多いのですが、重なるところはなるべく省略して私なりの文脈で触れておきたいと思えます。すでにナポレオンについての情報は、ロシア人によってもたらされてもいるのですが、なにより頼山陽が1818年に長崎に遊び、その地でオランダからの医者に聞いたとしてナポレオンを詠んだ漢詩「仏郎王歌」をつくったことは、ナポレオンの名を高めたといつてよいでしょう。しかしより詳細な形では、幕府天文方の高橋景保がオランダ甲比丹スツルレルからの聞きにより『丙戌異聞』を著し、また、ワーテルローの戦記—『別埒阿利安設 [ベレリアンセ La Bille Alliance] 戦記』—を、配下の吉雄永宜と青地林宗に蘭書（原書は不明）より翻訳させています。文政九年（1826年）のことです。この戦記は、「英雄フラセル（Blücher）およびウエルリントン（Wellington）の二人相助けて凶賊をうち、再び万民和平の勲をたてしは……」（住田正一編『日本海防史料叢書』第三卷、昭和七年）というように、ナポレオンを凶賊とするなど勝者の立場からの記述で、「何ゾハカラン大雪平地一丈強、王ガ馬八千凍エ且ツタフル」とモスクワ遠征の悲劇を詠いつつ、「方今五州奪攘ヲ休ムモ、何ゾ知ラン殺運西荒ニ被ラントハ」と危機意識を表明する頼山陽の詩とは、大きな違いを示しています。しかし、せまってくる変動への強い関心が、高橋景保をこうした作業に向かわせたのは確かであり、彼はさらに『仏郎祭国王ボロウルボン氏世系、付ボナパルト伝』をも著しています。彼のこうした探求の熱意が、シーボルト事件、そして彼の死を招くにいたるのです。

このようにして動乱への関心は、フランス革命自体よりはナポレオンに対して、より強く向けられながら、新たな西洋事情探求が19世紀前半には始まっているのですが、そのような動きのなかでもっとも注目されるのが、やはり渡辺崋山らの活動です。崋山自身はオランダ語ができなかったということで、高野長英や小関三英らの助けを借りていますが、彼を中心にした人々の仕事はわれわれの主題からいっても重要な意味を持つものです。たとえば、崋山の『外国事情書』、これは佐藤昌介氏によって岩波文庫の『崋山・長英論集』に収められました。これにはフランス革命そのものについての言及はないのですが、イギリスに始まった産業革命に関連する記述などが現れている。それより注意をひくのは、アメリカ合衆国の独立とその政体についての考察をしていることです。崋山は、「又近頃北亜墨利加ノ内ニ、『レピュブレーキ』又名ハ『フルエーニグデ スターテン』ト称シ候国所有之」と記し、それがイギリスにたいして「自立ノ国」となったとして、その政体について説明を試みています。そこで『フルエーニグデ スターテン』は、英語のユナイテッド・ステイツにあたるのですが、「会議<サウダン>共治<トモニヲサメル>」のことと述べています。この訳語は小関三英によるものと思われるのですが、いずれにしても崋山は、他の箇所ではヨーロッパで諸国が対立している状況について触れながら、君主国と「共治国<ゲメーネベストゲジンド>」を区別し、また帝国や王国のことを説明しようとしています。

この「ゲメーネベストゲジンド」がリパブリック、つまり共和国にあたります。アメリカの独立の事実を示したのは崑山が最初というわけではありませんが、前にも申しましたようにその独立は、日本に変動をもたらす新しい事態でありました。それが日本にとってどのような意味を持つのか、そのことはもう日本に現れつつあるのですが、その事実を、その政体とともにとらえようとする試みはこのように起こっていたのです。蛮社の獄の弾圧によってこの動きが頓挫させられたということは、実際大きなことでありました。

蛮社の獄の起こった1839年というのは、中国でアヘン戦争が勃発する直前のことです。そしてこの二つの事件の重なりは、その後の日本の対外認識の在り方にある種の影をもたらさざるを得なかったと考えられます。そのことをフランス革命とナポレオンの時代との関わりになるべく限って見てみましょう。

アヘン戦争は日本にも大変大きな衝撃を与えました。それが及ぼした影響の中でもっともよく知られている事実の一つは、魏源の編纂した『海国図志』のことでしょう。この世界事情についての書はまもなく日本にもたらされ、また個別の国の事情について部分訳がいくつか日本でも出版されまして、それが広く普及しています。その影響についてもっともよく知られているのは、「夷ノ長技ヲ以テ夷ヲ制ス」という言葉でしょう。しかしここでまず、見過ごされている重要な点について少し触れておきましょう。一つは、『海国図志』に初めてアメリカの独立宣言が漢訳されていることです。「乾隆四十一年七月初四日、檄シ各国ニ告ゲテ曰ク、上帝民ヲ万族同体ニ生ミ、各性命ヲアタヘ、其ノ分ヲ安ンジセシム……」（六十巻本、彌利堅総記・上）。恐らくこれは日本でも独立宣言の最初の紹介だったでしょう。もちろんここで、独立宣言における天賦人權にたつ個人の平等の観念は十分に表現されているとはいえません。しかしこの漢訳は、イギリス国王の暴虐に対するアメリカ人のやむにやまれぬ抵抗ということを強く押し出しています。それはアヘン戦争に直面した中国の側の危機意識に応じていたといえましょう。なおつけ加えておけば、フランス革命の時に起こったハイチの奴隷反乱とその独立も、この書に正確ではありませんが記されています。フランス革命の動乱も扱われていますが、民の反逆という以上の認識ではなく、ここではとくに触れません。

アヘン戦争の衝撃、それは日本でも西洋の力にどう対抗するかという危機の意識を強くかりたてました。19世紀、変化しつつある世界の動きをとらえるという関心は崑山らの活動を生み、『海国図志』の到来以前の1845年、46年には、箕作省吾による世界事情書『坤輿図識』『同・補』が著されています。これらには、かつて井上清が指摘したように共和党という言葉が使われ、またジャコバン派が「雅谷貌（ヤコベーン）義団」と表記されて登場したりしていますし、補巻には「那波列翁伝」が付されているなど、すでにそれらの事情についてこれまでにない詳細な記述がなされるようになっていきます。ハイチ独立が、奴隷反乱というよりはナポレオンに抗して自主を貫いたとして、多くの頁を費やして独立後の過程まで書かれていることも注目されます。しかし、蛮社の獄そしてアヘン戦争は、こうした認識の方向をより力の見地、軍事的な関心の方向にさしあたって向かわせることになったと思われる。佐久間象山に有名な「東洋道徳、西洋芸術」という言葉があります。「芸術」とは技術のことです。この言葉は魏源の「夷ノ長技を以テ夷ヲ制ス」に対応するものでしょう。このような軍事的関心の方向で特筆されるのは、崑山の同志と

して蛮社の獄に連座した高野長英のことです。

彼は捕らえられた牢から脱獄して潜伏生活をするのですが、その潜伏中に、生計を立てる必要もあったのでしょう、プロイセンの兵学書をオランダ語訳書を通じて日本語に訳しています。それが『三兵答古知幾』（1850年—『高野長英全集』第三卷、昭和五年）です。三兵とは歩兵、砲兵、騎兵のことです。崑山と同じ田原藩で、崑山や長英と親しい関係にあった鈴木春山という人物が『兵学小識』や『三兵活法』という書を出版していますが（『鈴木春山兵学全集』全三卷、昭和十二年）、実は『兵学小識』の内容は『三兵答古知幾』とかなりの部分が重なっています。それは、長英が『兵学小識』を潜伏中に補って『三兵答古知幾』を完成させたと思われるのですが、いずれにしても両者が密接な協力関係にあったことは間違いありません。

ところでこれがプロイセンの兵学書を元にしてしているということは注意をひかれます。といるのは、この元の書の著者はハインリヒ・フォン・ブランドというのですが、彼はプロイセンの参謀本部将校として、『戦争論』の著者クラウゼヴィッツの部下でもあった人物なのです。『戦争論』は、ナポレオン戦争がもたらしたヨーロッパの戦争の革命的といってよい変化をふまえ、戦争を哲学的、あるいは思想的ともいえる見地をふくんで考察した、この分野の古典の地位を占めている書であることは御存じでしょう。『戦争論』はクラウゼヴィッツの死の直後、1832年に出版されています。『戦争論』の翻訳は、明治に入って森鷗外が手掛けるのですが、ナポレオン戦争の後ヨーロッパに生まれてきた新しい兵学が、こうして高野長英によって早くも紹介されているのです。クラウゼヴィッツの名は、『三兵答古知幾』に「加老泄尔微都（カラウセルウィツ）」として現れています。『戦争論』の中で、クラウゼヴィッツは次のようにいっています。「文明化したヨーロッパにおいて、国民の戦争なるものは19世紀の現象である」と。「国民」の原語 Volk という言葉は民衆とも民族とも訳されますが、フランスの革命戦争で現れた民衆のエネルギー、それを動員し組織化したナポレオンの軍事力、それによってもたらされた戦争の新しい様相。クラウゼヴィッツは、その事態をいわば戦争の「国民化」としてとらえようとしたといえるでしょう。そして、ブランドの書も、当然このような変化をふまえています。しかし、長英にはそういう変化は十分理解できない。たとえば、『三兵答古知幾』の中で、「大鍵散隊戦法」についていっています。「大散隊は、払郎察人が大鍵隊というものである。払郎察革命の戦いには、その旺盛が極度に達した。」ここで「払郎察革命」という語が現われていることには注意をひかれます。しかし、軍事に未熟でも革命によって生み出された民衆のエネルギーを動員し、自らの意志で戦う兵の存在が部隊編成やその戦術を一変させていった事情は、なお長英にとっては考えの及ばないものでした。この書の翻訳に大変苦勞したことは、芒洋として意味がわからない所は多いなどと、序文にいつていることでもわかります。しかし、この翻訳は幕末には貴重なものとなったようで、後に勝海舟が、この本は五十両もしたと回想しています。またそれより前、ペリー来航の直後のことですが、吉田松陰は次のようなことを兄への手紙で書いています。「西洋流を毀るも知ってから毀るがよし、せめて三兵タクチクカ兵学小識にても研窮して上の事なり」（杉梅太郎宛、嘉永八年—以下、引用は大和書房版全集による）。長英や春山の訳業のひろがりを示すものといえましょう。

日本における対外認識の中での軍事への関心の高さ、そしてフランス革命というよりはナポレ

オンへの関心のかたよりは、やがて開国による人々の外国との具体的な接触のはじまり、他方では倒幕、さらには新政権への動きの中で新しい対外認識の段階を迎えます。いま、ここではそうした転換期に立つ象徴的ともいえるエピソードに触れておきましょう。いま触れた吉田松陰が、安政の大獄によってあらたに野山獄に投じられた後の安政六年（1859年）次のようにいっております。

「独立不羈三千年來の大日本、一朝人の羈縛を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。那波列翁を起してフレーヘッドを唱へねば腹悶醫し難し。僕固より其の成すべからざるは知れども、……今の幕府も諸侯も最早醉人なれば扶持の術なし」（北山安世宛書簡）。

フレーヘッドとはオランダ語で自由という意味です。これがナポレオンと結びつけられています。これはどこからきているか。かつて、木村毅が「『自由』はいつ日本に入ってきたか」（開国百年文化事業会編『明治文化史論集』、昭和二十七年）という文章で、これを小関三英の『那波列翁伝』によるものと示されていました。最近では先に触れた岩下氏が、その写本や刊本について詳しく考証されています。また、半谷二郎という方の著書『小関三英』（1987年）に松岡台川が安政四年に刊行した本が収録されていますので、なるべく簡単にしておきたいのですが、要するに、三英のこの書では、ナポレオンが友人たちとリヨンの劇場でウィリアム・テルの芝居を見たとき、舞台の上の「フレイヘイド、フレイヘイド」との声に呼応して、覚えず「ヤー、ヤー」「フレイヘイド、フレイヘイド」と叫んだ、というのです。興味深いのはその記述で三英は、フレイヘイドの語に「敵国に打勝ちて不羈の国となりたるを祝するの辞也」と注記していることです。このように、フレイヘイドは不羈、自主独立の観念と結びつけられていた。それを松陰は獄中で、さらに幕府や諸侯を否定して「草莽崛起」に向かっているのです。松陰は別のところでは、「天下の形勢変革の時節」といいつつ、なお「草莽」も力がない、「百姓一揆にても起りたる所へ付け込み奇策あるべきか」（野村和作、入江杉蔵宛書簡、安政六年）といっています。ここに彼の土意識を見ることはできましょう。しかし彼には、もはや危機はただ外圧にだけあるのではなかった。その目は<内>の体制に向けられていました。そのことを、彼は中国の例から学んでいた。アヘン戦争の時、広州の三元里の農民が「平英団」の旗をかかげて蜂起したことに彼は共感を示し、清朝がこの農民の動きをおそれるばかりであったことを批判しているのです。「嗚呼、万乗の尊きを以て自ら居りて、すなわち粵東の黎庶だにも如かず」（『粵東義勇檄文の後に書す』『未焚稿』）。アヘン戦争における中国の敗北の責任を、頑冥な清朝の中華意識に求め、体制のあり方を問う意識は、すでに日本にあらわれておりました。松陰の場合、<内>の体制批判は明確に幕府に向けられていました。しかしこの時、松陰がむかうのは、「独立不羈三千年來の大日本」—「神州」の観念です。「フレーヘッド」を支える民の権利、そして民自体の「自由」は、決してはっきり問われているわけではありません。「自由」が、フランス革命のそれと結びつくのは、まだ先のことです。しかし時代は新たな転機を迎えつつあったのです。

さて当初の予定では、最初に述べました時期設定の第三の時期について、少しスケッチをしておくつもりでした。つまり日本が開国によって新たな世界の中に入って行ったとき、そして新たな国家体制への道を歩み出したとき、とりわけ自由民権運動とともにフランス革命の意味をも、

いわば正面から問うことが課題となって現れはじめたとき、その認識はどのようなものであったのか。そのことについてある程度の問題設定をしておくつもりでした。しかしもはやその余裕はありません。ただ最後に若干の方向を示しておきたいと思います。それは、この時代、はじめに述べましたように、フランス革命とナポレオン戦争の動乱を経て、アジア・太平洋が「世界化」への波に直面して行ったとき、それは当然のことながらヨーロッパも新しい歴史の中に進んでいることを意味していたということです。日本におけるフランス革命への目ということに引きつけていうと、第一は、あらたな国家の体制の在り方につらなるヨーロッパにおけるいわゆる国民国家形成とナショナリズムの問題です。日本は、このナショナリズムの時代に新しい国家形成の時を迎えるのです。しかし一方、諸国は明治政府成立のころ、急速に帝国拡大の途に歩を進めています。それは逆からみれば、いうまでもなく、アジアやその他の地域の「世界化」に新しい問題をもたらすものです。日本もまた、そういう問題の生まれる世界の只中に入って行くことになります。それは単なる「文明開化」ではありえなかったのです。さらに、ヨーロッパの諸国内部についてみれば、そこにはこれまでなかった対立が現れてきています。日本のフランス革命認識に関連して、より具体的かつ直接的に言えば、パリ・コミューンがその現れです。これらの問題は、まさに明治維新から民権運動の起こる時代の転換期に、同時代として重なり合って現れ、そのことはフランス革命に問おうとする当時の日本人にのしかかっています。中江兆民などはこの事実を引き裂かれたような課題を背負ったとも思われます。実をいいますと、日本でフランス革命が正面から問われようとしたのは、民権運動の興隆する十年ほどの間に過ぎません。明治七年(1874年)は、板垣退助らによる民選議院設立建白書が出された年ですが、この年、中江兆民が、のちに仏学塾となる仏蘭西学舎を開いております。ここで兆民が、ルソーの「民約論」の訳をテキストに用いたといわれておりますが、明治十年には出版されたものとしては最初である服部徳訳『民約論』が出ています。同じ年、本格的なフランス革命史の翻訳として、ミニエ原著の『仏国革命史』が出版されています。日本で、フランス革命と正面から向かい合う時代が開かれたといえましょう。しかし、その時代は長くは続きませんでした。自由民権運動と歩みをともにしながら、明治十七年の秩父事件などの敗北を転機にして、明治十年代末には、フランス革命への問いそのものが、急速に退潮に向かう。あるいは、その意義を否定する方向に向かう。そして、この短さ自体が、実は日本の近代国家形成の特質とその問題点を凝縮して示すように、私には思われます。こうした時代のことは、また時をあらためてとしなければなりません。大雑把な提示で申し訳ありませんが、これをまとめて代えさせていただいて、報告を終わりたいと思います。(この小論は、第5回公開講座での報告をもとに、若干の手直しを加えてまとめたものである。最後のまとめの部分は、報告とは大きく異なっている。)